

20年前、アメリカでの同時多発テロの発生を知ったときのことは今でもはっきりと覚えています。ただ、その記憶が覚めやらないのは、初めて知ったときの衝撃の大きさをゆえではありません。映像を初めて見たときの衝撃は計り知れないものがありました。けれども、直ぐにテロに結びつけることはありませんでした。それは、そのようなことがあり得ることではなく、日常においてあり得ることだと、そのとき、そう思っていたからです。ですから、障子の向こうから家内に声をかけられたときにも、「アメリカでは時々あるみたいだよ」と呑気な返事をしたほどです。それは、先の大戦中、アメリカの爆撃機B17がエンパイアステートビルに突っ込み、その突き刺さった写真をそれ以前に見たことがあったからです。ですから、話を聞いて直ぐに思い出したことはそのことでした。けれども、もちろん、いつまでもそのままであったわけではありません。言葉を失い、胸が締め付けられることにもなりませんでした。しかし、事件を思い起こす度に思い出されることは、事の重大性とその衝撃の大きさに加えて、しばらくの間、呑気な自分であり続けたことです。そして、もう一つ。聞いて見て知っていくその過程でいつの間にか呑気な自分を取り戻していたことです。つまり、驚かなくはないし、よくあることだとは思わないまでも、胸がきゅっと締め付けられることが徐々に少なくなっていくということです。それは、呑気さに拍車がかかったからではありません。もちろん、耐性ができたからでもありません。同時多発テロ以降、想定外の出来事が繰り返される中で、かつて衝撃をもって受け止めたことが、日常の中の一つとして受け止められるようになっていったということです。それゆえ、3.11や9.11などの未曾有の出来事を思い起こす度に感じることは、変えようにも変えることのできない、この自分自身の呑気さと、この呑気さをそのまま良しとすることもできない、気持ちの悪さなのです。ですから、イエス様が今日私たちに最初に仰っているこの一言は、私の胸を深く刺し抜くものでもありました。

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない」とイエス様はここで先ずそう仰っているのですが、このことはつまり、祈りは必ずしも真実なものばかりではなく、偽りがあると、誰でもないイエス様がそう仰っているということです。ただし、イエス様がこう仰っているのは、共にある私たちのことではなく、イエス様と意見を異にするフアリサイ派の人々についてです。ですから、こう言われていることについては、私たちはさほど気にする必要もないのでしよう。イエス様が、彼らが「人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる」と仰っていることを、私たちが同じようにするはずはないからです。ですから、「あってはならない」と仰ることは、「あるはずがない」と、私たちのことをイエス様がそう理解しているということなのです。それゆえ、イエス様が「偽善者のようであってはならない」と仰ることは、そう考えるなら、一つの可能性、一般論に近いものだと言えるのでしよう。それは、そういうものと明確に一線を画しているのが私たちであるはずだからです。

ところが、私だけでなく、その私たちが、イエス様が「偽善者」と仰るこの言葉に時に過剰に反応してしまうのはどうしてなのでしょう。それだけではありません。イエス様はここで「あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい」と仰ってもいるのですが、この言葉を皆さんはどのように日頃受け止めておられるのでしょうか。多くはイエス様が個人的な祈りを奨励していると思われているように思うのです。ですから、この御言葉を引き合いに、お祈りくださいとの牧師の依頼を断る人が後を絶ちません。そして、かくいう私が以前そのような一人でありました。ですから、正直に申し上げるなら、私が讃美歌を声を出して歌うようになったのも、また、主にある兄弟姉妹と声を出して祈りを合わせられるようになったのも、神学校に行くことが決まってからのものでありました。なので、ここでイエス様が仰っていることを理由に、どれだけ牧師を困らせたかは分かりません。

それだけではありません。山上の説教の中でイエスが仰っている一つ一つのこころとは、自分への言い訳や相手を攻撃するたための言葉として、かつどれほど使ったかとも思われるのです。つまり、自分自身の弱さを誤魔化し、偽るためにイエスの言葉を利用したということです。ですから、先ほど私が私自身の呑気さを良しとすることができないと申しましたことは、それゆえのことでもありませんが、それは、かつての自分と今の自分と一体何が違うのかが、はっきりと分らなくなることはあるからです。

では、それはどういうときなのか。それについては、それがいつなのかは私にもはっきりと分かっていません。それは、祈ることができないときです。それも、できるできないということではなく、祈りが祈りになっていかない、ならない、そのように感じるときです。そして、それは、イエス様と共に神様の御前に立つそのときでもありますが、私たちにとって、今がそのときでもあるのです。そのとき、自分自身の偽りの仮面が剥がされて、いや、剥ぎ取られて、自分自身を見失い、祈ることができなくなってしまう、祈りが祈りになっていかないということが起こるのはそのようなときです。それは、どんなに自分を取り繕おうとも、神様とイエス様だけには、嘘も誤魔化しも通用しないことを知っているからです。ですから、ゲッセマネの園でイエス様が血の汗をしたたらせ祈られたように、私たちにとっての祈りとは、清々しいばかりのものではありません。時に、死を彷彿させるものであり、身に危険の及ぶものでもあるのです。ですから、祈るに際して、イエスが「奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい」と仰るこのお勧めは、個人的な祈りをイエス様が良しとされている、ということではありません。イザヤ書に「さあ、我が民よ、部屋に入れ。戸を堅く閉ざせ。しばらくの間、隠れよ。激しい憤りが過ぎ去るまで」とあるように、神様の御前に立ち、献げられる私たちの祈りは、悪しきものからの避けどころとしてあるだけでなく、神の裁きから逃れるために備えられているものでもあるからです。

ただ、そこで一つの疑問が湧いてきます。イエス様は「そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」とここで仰っているのですが、自分を見失い、嘘と誤魔化しに満ちた祈りしか献げられない私たちが、場所を

え、環境を整えたとして、その祈りが本当に祈りとされていくのでしょうか。自分を偽り献げられるその祈りが本当に神様に届けられることになっていくのでしょうか。しかし、それゆえにまた思うので、ここでイエス様が「あなたの方の父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」と仰ることとは、そのような不安に呵まれる私たちにとっては大きな慰めを与えるものでもあるからです。それは、私たちの願いが私たちの言葉ではなく、恐れと不安から言葉にならない私たちそのものを通して神様が受け止めてくださっていると、イエス様の言葉には私たちにそう信じさせる理由があるからです。まただから、イエス様も「異邦人のようにくどくど述べてはならない」と仰るのです。それは、私たちにとっての祈りとは、神様に対する言い訳や弁解ではないからです。つまり、祈りとは、技術的な問題でもなく、また、場数をどれだけ踏んだかの個人的な経験の多い少ないに関わるものでもないということ。神様と私たちの関係性の中からは絞り出されるように出てくる、この自分自身の言葉が祈りであり、つまりは、神様との関係性に生きること自体が私たちにとっての祈りそのものでもあるということ。です。

ですから、そこで問われることは、今この話を私たちにしてくださっているイエス様との確固たる繋がりをもって神様を見ているか見ていないかということ。それゆえ、自分の祈りが祈りになっているかいないかを気にするあまり、それが本当に神様に届いているのかいないかが分からない、そのため、それが不安で不安で仕方ない、それが私たちの祈りの姿ではないということ。ゲッセマネの園でイエス様が神様に向かって幼子に返るかのように、「アッバ、父よ」、「お父ちゃん、パパ」と叫んだように、また、パウロが「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。」と語るように、私たちが自分を見失いながらもなお神様の御前に立つそのとき、そのとき、私たちは、神様というこのお方を前にして、自分がいかなるものであるかを知らされるのです。ですから、そこでは、私たちはいい子であり続けようとする必要はありません。けれども、だから悪い子のままでいいということでもありません。そのように思う時、いい子であるか悪い子で

あるかの物差しは、神様ではなく、私たち自身にあるからです。そういうことではなく、私たちの目から見ていい子であろうか悪い子であろうか、私たちは共に神様に愛されている一人一人であり、その自分自身を取り戻すためにも、私たちがイエス様と同じように、自分自身が神様の子であることを手放しで、丸裸で受け入れる必要があるので。しかし、それは、自分を誤魔化し、取り繕いたくなるほど恥ずかしいことでもあるのです。けれども、それが赦されているのが私たちであり、そして、祈りにおいて私たちが一番に願う、また、求めることは、この、丸裸の自分自身を受け止めていただいているという安心感でもあるのです。

ですから、そう考えるなら、私たちがこうして礼拝に集められ、御言葉に聞いていく直前に、共に主の祈りを祈ることとはとても大切なことです。それは、神様とイエス様を見失い、祈ることのできな私たちが、主の祈りを共に祈ることと、神様に愛されている自分自身を取り戻す切っ掛けをつかむことができるからです。従って、そこで大事なことは私たちが一人一人がそう私たちに呼びかけるイエス様に身も心もすべて預けることです。そのためにまた、私たちは主の祈りを実際に心を合わせてこの祈りの言葉を口にするのですが、そこで、一つ皆さんにお尋ねしたいことは、主の祈りを共に祈るとき、自分の周りの人たちの祈るその祈りの声をどれだけ聞いているのでしょうか。細かいことを申し上げ、恐縮ですが、私は信仰においてはこういう細かいところが大切であると考えます。それは、イエス様が「だから、こう祈りなさい。」と私たちにすべてに勧めるように、私たちが礼拝において主の祈りを祈るといことは、個々バラバラにすることではなく、一人一人のその声の一つに合わさってこそそのものだからです。そして、その大切さを知らされたのは、私の求道中のことでありました。母教会の礼拝において、「ああ、これでいいんだ、信仰はこういうものなんだ」と、そう実感させられたことがあったからです。

そのときのことは今でもはっきりと覚えていますが、大勢の人たちの祈るその祈りが誰に導かれるのでもなく一つになっていたのです。私はそのことに深く感動したのですが、そのときのことを正直にお話ししますと、私がそう感じたのは、実は目を開けて、じっと主の祈りを祈る会衆の声に聞いていたからです。

そして、そこで思ったことが先ほど申しました「これでいい、これでいいんだ」ということでもありますが、では、どうしてそう思ったのかと言うと、それは、教会に足を運ぶようになってちょうど一年も経った頃のころでして、一年も教会にいと、いろいろなことを耳にするものです。ましてや、当時は青年会活動が盛んな頃でもあり、教会にいた時間が長くなればなるほど、教会についてのいろいろなことを知ることになります。そして、それは、いいことばかりではありません。誰と誰がどうだといった類いのことを含めてのものであり、それゆえ、教会はああさういふところなんだと、そう思い始めた頃でもありました。ですから、目を開けて、主の祈りの言葉を聞こうと思ったのはちょうどその頃のことでもありますが、そこで、会衆が主の祈りを祈る姿を目を開けて見ると、そこには不思議な光景が広がっており、「誰と誰が」と言われている人たちが同じ一つの方向に向かって声を出して祈っているのです。しかも、その祈る姿には迷いもなく、また乱れもない、同じ一つの祈りを祈っているのです。私がその祈る姿、祈るその声に釘付けになってしまったのはそのためでもありませんが、それは、その心地いい響きに魅了されたからではありません。矛盾に満ちあふれる教会でありながらも、同じ一つの方向を見つめ、その方向に向かって共に進み行くことを肌で感じることに許されたからです。そして、それがまさに主の祈りの力であり、まただから、イエス様も「だから、こう祈りなさい」と人々に勧めるのです。

そこでもう一つ皆さんにお尋ねしたいのですが、では、主の祈りを祈るとき、皆さんは何を感じているのでしょうか。主の祈りを祈るに際しては、そこには一つの形があり、リズムがあります。特に、1880年訳と言われている、私たちが口にして主の祈りは、言葉の響きとそのテンポの良さから私たちの体に染みついていてもいます。ですから、主の祈りを祈りつつ私たちが感じることは、調和であり、一致でもあるのでしょう。そして、それが主の御前に集う平安で満ち足りた私たちが信仰者の姿だとも言えるのですが、ただし、私たちにそれが許されているのは、私たちに矛盾や対立がないからではありません。そもそもこの祈りの中例えば、矛盾や対立がこの祈りの言葉の中ではっきりと記されているのです。つま

り、私たちが祈る主の祈りの中には矛盾と対立を含まれているということです。例えば、最初の「天におられる私たちの父よ」との呼びかけです。主の祈りを祈る私たちに平安が約束されているのは、私たちが神様のことを父よと呼びかけることが赦されているからでもあります。けれども、神様に父よと呼びかけることの許されるほどの神様との近さは、同時に、天におられる、とあるように、果てしなく遠いものでもあるのです。つまり、近くにありながら、遠くにいます神、これは私たちにとっては矛盾以外の何ものでもありません。それゆえ、この矛盾は、私たちと神様との対立関係を現しているとも言えるのでしよう。

創世記11章のバベルの塔が物語るように、思い上がる人間から一体性を奪ったのが私たちの神でありました。また、それ以前に、この神様との一体性をそもそもの所で軽んじたため、神様との関係性に克服できないほどのダメージをもたらしたのが私たち人間でもありました。従って、主の祈りの中にはっきりと刻まれているのは、この消し去ることのできる私たちの置かれた現実そのものであるということです。ですから、かつてルターが「最大の殉教者は主の祈りである」と言ったのはそれゆえのことでもありませんが、それゆえ、主の祈りをお題目のように唱えるだけとの誹りを、私たちは免れないことにもなるのでしよう。このことはつまり、ルターが言ったように、主の祈りを祈りつつ私たちがしてきたことは、そう祈るよう勧めるイエス様のことを数限りなく礎にしてきたということです。従って、それでいいのかと問われれば、誰一人として言い訳できる者はおりません。それゆえ、ルターが言うように、私たちはこの事実を事実として深く心に留めなければならぬのですが、ところが、本来は私たちが厭うべきこの状況を私たちは良しとして受け入れているのです。では、そこで私たちは何をすればいいのでしようか。

イエス様が「私たちの負い目を赦してください。私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように」と祈りの言葉を教えているように、私たちに負い目だけを負わせることがその目的ではありません。もちろん、負い目をなかつたかのようにすることもありません。私たちが生きるということ、こうして生きているということは、負い目を負ったり負わせたりするものです。そして、それが生きるということ、生きているということ

ある以上、そこから離れて私たちは生きることにはできません。けれども、そこから離れないということは、私たちが矛盾と対立のただ中に生きていることでもあります。まただから、私たちは可能な限り、それを避けようとするのです。けれども、寛容を説きながら不寛容な実態が露わにされることはよくあることで、矛盾と対立を私たちが生きるこの世界から完全に取り除くことはできません。同時多発テロから二十年が過ぎ、矛盾と対立というこの課題をいかに解消するかが私たちの今日的な課題でもありますが、そのためにまた、イエス様は、私たちが主の祈りと呼んでいるこの祈りを私たちに与え、そして、ただ与えるだけではなく、「だからこう祈りなさい」「さあ、祈りましょう」と呼びかけるのです。それは、私たちがこうして招かれているところが、神様の力に満ち満ちた場所でもあるからです。

ただし、その場所は、そこに招かれるのが私たちである以上、矛盾と対立に満ちあふれています。けれども、その場所にいるのは、矛盾と対立を抱えるしかない私たちだけではありません。主の祈りの中にいるのは私たちだけでなく、そこには必ず「さあ、祈ろう」と仰るイエス様も共にいてくださっているのです。そして、その中で私たちは聞いているのです。イエス様の「もし人の過ちを赦すなら、あなた方の天の父もあなた方の過ちをお赦しになる」との御声を。それは、矛盾と対立を抱えるしかない私たちに招く理由が私たちに赦しと平安を与えるものであるからです。ですから、私たちの中から出てくるこの矛盾をいたずらに忌み嫌い、取り除こうと足掻く必要はありません。そうではなく、矛盾と対立のただ中に私たちがイエス様と共にしっかりと立ち得るなら、私たちは神様の赦しに与り、平安のただ中に導かれるのであり、まただから、私たちと関わりを持つすべての人々をも神様は赦し、平安のただ中へと導いてくださるのです。それは、人の目にどう映ろうとも、この希望によって導かれているのが私たちの生きるこの世界でもあるからです。ですから、この希望の中に新しい朝を迎えるためにも、主の祈りを共に祈りつつ、この希望をしっかりと心に刻んで参りたいと思います。祈りましょう。